

## 「永遠の平和を願って」

福寿学園 陶芸部 真田 晃

このたび第26回神崎福寿老人大学祭に臨んで、私に体験発表をお願いしたいとの指名を頂きました。とても私にそんな席で皆さんにお話し出来る話芸も語学もないのに、聞いて頂ける様な発表体験もないので、お断りしたのですが、是非にとのことで、それでは私の唯一心底に残る太平洋戦争に参加して、残虐悲惨を見た体験では如何でしょうと言うことでお受けした次第です。因みに私のこの主旨は、この体験を私たち生存した者が、機会有る度に悲惨の実態を次世代に語り次ぐことで、今の平和を持続する事を願って、僭越ながら記述させて頂くことになりました。

## 一、入隊から中国の17ヶ月

自分の兵歴は当時称して昭和16年兵で、招集により昭和17年1月に岡山工兵十七連隊後ろ月七三八八部隊となるに入隊して、初年兵教育を受けること7ヶ月。そして7月21日宇

品港より釜山港に上陸。朝鮮半島を鉄路縦断現中国北部の正定県に駐留することとなる。此の頃には支那事変の戦況は進攻作戦も終わり、後の治安維持と北支方面のゲリラ隊の八路軍のテロ行為の警備等が任務で、時には工兵隊本分の道路補修や橋の補強作業等が仕事であった。そして此処での駐留は7ヶ月であった。次に中支の除州市へ移駐となり、此処では工兵隊独自の所有する器具資材の補修改造等の作業が主たる任務で、偶に治安警備に付く程度で、此処での駐留も5ヶ月であった。又転進で、次は黄河河口の当時の昭和島に駐屯することとなり、此処でも除州と同じ作業が続く日々で、昭和18年を迎えた。少し余裕が出来たので、此処での日曜日には外出が許され、上海の市街の映画館へ映画を見に行ける日もあった。そして月日が過ぎ、10月初旬に次の進駐地の指令が出た。其処は太平洋南海の孤島ニューブリテン島に決まって、即今まで補修強

化して来た諸材及び食糧、戦闘機材等を輸送船へ積み込みのためウースン港へ運ぶことになり、連日運搬の日が続いた。其の間に輸送船団の規模が組成された。その組立は輸送船四隻、護国丸・日枝丸・清澄丸・粟田丸の四隻に、護衛艦に駆逐艦二隻、巡洋艦二隻、海防艦一隻の船団になった。自分等工兵隊は護国丸に乗船することに決まり、持って来た諸材の積み込みをはじめ。そしていよいよ出港の日が10月20日となった。これで中国での駐留17ヶ月が終わった。

## 二、輸送船の海上12日間の旅に

そして、20日の夕刻ウースン港を出港して、東支那海を南下して二日ほどの航海だったと思つた頃、夕暮れに突如艦内放送で「海軍乗組員直ちに部処に着け」との命令に、甲板で激しく海軍が部処に着く足音が騒々しくなった。船の揺れも大きくなり、陸軍は船室で転げる程の揺れが続いた。その頃、丁度陸軍は船酔いで酔魔に襲われていたが甲板へ上がれず、只船室で嘔吐に苦しんでいたが、尚船は蛇行を続けていた。因みに陸軍が甲板に上がれない理由は、ウース

ンを出る時船の副長より「甲板は海軍の戦場で汚さず邪魔されずの場であるので、輸送中は陸軍に守ってほしい」との通達があったので甲板へは許可なく上がることが出来なかった。そして何時間かのち船は安定になって、尚南下を続けているうち27日になった。トラック島に寄港することになり、此処で燃料、其の他の補給のため、一泊することになる。そして其処で見たのは彼の日本海軍の誇りと言われた戦艦大和の勇姿だった。そして此処で初めて聞いたあの東支那海での異状は、船団の一隻粟田丸が台湾東方の海上で米潜水艦の魚雷を受けて残念に沈没したということだった。そのことを聞いて改めて太平洋戦争の悲惨を痛感した。そして翌日トラック島を離れ、尚南下すること二日。又日枝丸が敵空軍の機銃弾により甲板上で若干の被害を受け、ニューアイルランド島に一時寄港することになった。あと二隻でラバウルに向けて航行。遂に11月2日に目的のニューブリテン島ラバウル港に入港。以上12日間の太平洋上の犠牲と被害の航海を終えて陸上の陸軍となって任務に服することとなる。

### 三、ニューブリテン島の17ヶ月

そして、上陸後3日より積み込んだ諸材の陸揚げ作業に入り、4日の昼前には敵空軍の警報があった。退避体制に入るも、海岸でまして上陸2日目と土地の防空壕も少なく、右往左往のうちに上空に飛来、雲間より急降下銃撃により一瞬のうちに、多数の犠牲者と負傷者を出した。航海中幸い二隻は被害無く、無事上陸して初めての悲惨を受けた。勿論我が空軍も、高射砲攻撃に対戦するも機数の多さに残念に損傷を己むなくされた。因みにこの敵機数約二〇〇機。そして4日の午後は、当然被災者の屍の始末処置等を涙して収拾して、その夜は宿営で追悼を行った。尚5日も作業を続けて漸く終わり。輸送船は直ちに引き返し帰行した。そして引き揚げた器材機具の整理を終え、次の進駐地の命を待つこと4日。11月10日に進駐命令で、島の約中央部に当たるガブと言う基地へ行くことになり、海路駆逐艦で進駐。そこは島の北側にある基地で、任務は其処から南への横断道の建設作業である。その頃には島の南東部にあるソロモン諸島のブーゲンビル島のタロキナまで、敵軍の上陸戦の交戦

が続いていて、建設が急がれていた。早速作業に係ったが建設機材が不備なので進捗が鈍く、天候にも悩まされながらの作業であった。その頃にはソロモン地域の戦況は日増しに撤退の一途の様子で、心身共に疲労する中、時が過ぎ18年の幕も開けた。19年を迎え戦況厳しい中にも、新年の印に餅入りの雑煮が出された。作業交代で二日の休みを得て尚続けるが、戦況は益々厳しくなり、前線の守備隊も己むなく撤退。遂に2月になり、方面軍司令部より「此の地域方面軍兵士は全員ラバウルへ転進せよ」との命により、今度は陸路の行軍となるが、道は原住民の作った道なので、どの程度の道か把握もない行軍を始めた。出発する時点では、各隊で分隊単位で組んで出発したが、月日を重ねる毎に疲労が出て来て、徐々に落後兵が出始めた。各部隊で組成されたメンバーの乱れが出る様になり、統一した行軍が出来なくなり、指揮系統も取れなくなり、各部隊共単独行動の状態になった。従って衛生兵も階級格差もない状態になり、まさに無法行軍になった。行軍は続くも、弱体兵は路端に倒れて逝く友、苦しみを訴える友、病魔におかされ苦しむ者等を路端で、休

息場所で見かける日々が多くなった。時には息絶え絶えで水を要求する友もあった。水筒の残り少ない水を与えると、其の場で逝く友を見ながらも、自分も極度の疲れで如何様ともしがたく、只見過ごして行く罪悪感を忍びながらの悲壮悲惨の現実を見て、「戦争」という人間にとってこれほどの罪悪を、なぜ行うのだろうと憎しみながら尚も進む。その頃には各自の持っているはずの装備の品、銃背囊弾薬等は捨てて、最悪の時の手榴弾2個のみの軽装になるも、尚変わらぬ生き地獄の行軍が続いた。月日重ねること2ヶ月近くなった。4月半ばに遂に里程500キロのラバウルに着くことが出来て、達成感から自分はマリア熱により野戦病院に入院すること2週間、漸く我に還った気がした。そして原隊に復帰して、最後のラバウル攻防戦に備え、敵対陣地の補強作業に付くが、敵機が日常飛来して機銃攻撃を受けながらの作業であった。当時のラバウルは対空戦の機能は低下して、制空権は敵にも作業に従事するうち、時も過ぎて、19年も暮れ一九四五年を迎えた。それぞれの各部隊でも必要な作業を続け、ある部隊では長期戦に備えて、

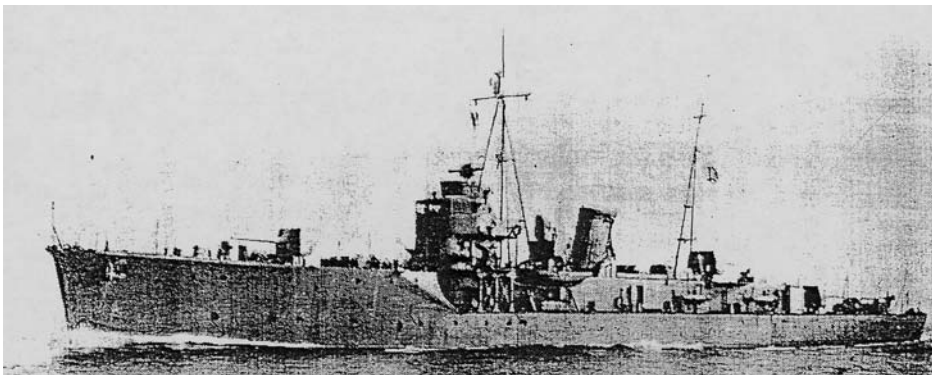
山を開墾して陸稲を植える作業に係る部隊もあり、ラバウル近在の駐留部隊一丸となって防衛作業に取り組んだ。そのうち8月になり、ある日より、連日飛来していた米軍機が来なくなり、不審に思ってた戦友と話し合っていたとき、16日正午に営処に集合の連隊長の通達があり、終戦を知りましたが、内容は無念の敗戦だった。その報を受け、将官の幾名かの自決もあったが、司令部より、「その心境は解るが、心沈めて今の生存者が一人でも多く祖国へ生還して、復興の為、努力してほしい」との通達があり、冷静に戻り捕虜に甘んじることとなった。

### 四、そして捕虜生活から復員まで

捕虜生活に入る前に、敗戦の掟で武器弾薬及び装備品一切の引き渡しを、敵の指定された箇所集積することになり、その作業を終えて身辺の整理も整えて、9月に入り敵軍の指揮下に従事することになった。因みに此の時点でのラバウル在駐の日本軍は約二万名。それを四集団に分割して場所毎に集団村を作り、宿舎の建設の手伝い作業。宿舎が出来て日本軍の配分がなされ、指定され

た集団に分宿することになった。そして一段落してよいよ捕虜生活になり、日曜以外殆ど米軍の指示により、色々の作業に従事すること、3ヶ月が過ぎ、一九四六年を迎えた。

(作業の詳細は苦楽様々で記事には不可能なので割愛します。) として尚作業は依然続くが、ある時点から米軍の許可により、日曜の夜に集団毎に慰安会が出来る様になった。それぞれの集団で趣向をこらして演芸会を催すことになり、実施される夜にはその集団へ観賞に行くと、米軍も一緒に観賞する風景が見られる様になって来た。でも捕虜には違ひなく、連日の作業を指示され従う日が続いた。そして昭和20年も終わり、21年を迎えたが、変わることなく生活は続き4月になった。すると、ある日何処からか近いうちにラバウルに引き上げ船が来るらしいと言うニュースを聞いて、戦友と互いに話し合っているうち、本当に18日に来ることが通達され、20日に乗船と決まった。いよいよ母国へ復員だと思いい、即集団村周辺宿舎の整理清掃、身辺等の始末を日本軍人の汚点を残さず、誇りを残すため、完全に終えた。20日の午後引き上げ船隠岐に乗船、憎しみの島ラバウルを離れ、祖



工兵第十七聯隊復員船 海防艦「隠岐」 870Wt 19.4k 昭和21.4.21.ココポ出発、4.30.浦賀到着。本艦は昭和22.8.青島にて賠償として中国国民軍に擧取され「長白」と改名されたが、後に中国軍に移る。

国へ北上航海の途についた。因みに帰路の航海中に見た希な情景を、一筆だけ記させて頂きます。それは太平洋でしか見られない現象ではないかと思えます。航海中、ある日は一日中何も見えず、ある日は小島の並ぶ日、又地球の丸い球儀を確認出来る日は、見渡す限りの大海原で、水

平線の彼方から何か見えて来たと思つて見ていると、徐々にその影が大きくなり、やがてそれが船になる様などは、近海で見ることの出来ない情景ではないかと思ひ、又、夜の海は夜光虫がきらめき「今に例えれば、緑色のダイオード」の光を見ている様な海面を眺める夜もあつたことを思い出しました。話が外れて失礼しました。そんな楽しい安全な航海を10日間の船中で様々懐古のうちに、懐かしの母国の浦賀港に着いて、離国四年余りの上陸に感涙して、免疫を終えて5月3日、故郷への列車に…。

#### あとがき

以上、記述に記し難い事項もあり、自分の体験は、当時の全戦域のほんの一部に過ぎないと思ふとき、改めて戦争ほど人間にとって残酷非道は無いという事実を重ねて、後世に訴え、此の平和の根源の現憲法九条を固守して、広島・長崎の世界唯一の被爆国を忘れず、平和の堅持を過去の一兵卒の願ひとして、恥じらいの記述で終わります。

